

# 石巻・大川小の10年を映画に

## 学びの場になるまでを記録

東日本大震災の津波で児童と教職員の多くが命を落とした宮城県石巻市立大川小学校を巡り、震災直後から校舎が震災遺構として公開されるようになった後までを描き出すドキュメンタリー映画が完成した。来春以降に上映の予定。石巻市教委が開いた遺族説明会の模様や、裁判の経過、遺族らへのインタビューなどで構成。10年間の日々を2時間に収めた。6月11日には、専

修大学で試写会と出演者らによるパネル討論があった。

この映画のタイトルは、「生きる—大川小学校 津波裁判を闘った人たち」。テレビ番組のディレクターを務めた経験を持つ寺田和弘さんが監督して、制作した。遺族が撮影した映像を活用した。

映画からは、大川小学校の裏山には、たやすく避難できたことが

よく分かる。実際に、一部の児童と教員は裏山に避難して命を取り留めている。

映画からは、大川小

裁判では、当時、被害に遭う7分前までには津波が来るのが予見できたことや、地震発生時の避難先が実際に存在しない場所だったことなどが明らかにしている。また、生存している当時の教員が公の場ではほとんど発言できない状況にあることなどから、分かっていないことも多い。

映画では、石巻市教委と遺族との間で溝が広がっていくまでの経

## 「あなたたち」の責任問う

6月の試写会は、専

修大学の飯考行教授（法社会学）が中心となって企画した。同大学の学生らが視聴した。上映後のパネル討議では、同大学3年生の桑末来子さんが、「校長の仕事は避難計画を適切に立てること。組織的な対応の必要性を裁判で位置付けたことは意義があると思う」と話した。

過に始まり、閉校となった大川小学校が昨年7月に震災遺構として公開され、学びの場と

なっていることなどを描いた。

遺族へのインタビューでは事故の背景として、当時の大川小学校の教員同士の関係について触れた場面も出てくる。

公開され、学びの場と

## 出演者らパネル討論

作家の吉岡忍さん

は、震災が起こって間もなく被災地を訪れている。「子どもの一人が裏山に行こうと言ったのは最大の救いだ。この子は、何が起きているか分かっていて、自分で考えていた。自分で考えた」と述べ、自分で判断できるような指導の必要性を訴えた。「ものを考える経験をしな

試写会後のパネル討論。右奥から桑さん、吉岡忍さん、今野さん夫妻、佐藤さん、寺田さん、吉岡和弘さん、齋藤さん



た。裁判で原告団長を務めた今野浩行さんは、「これまでに以上に防災意識を持って、自分の命を守ってほしい。自分を守れないと他人を守れない。自分が助かることが第一」、妻のひとみさんは、行政の対応について、「2度目に殺されたようだった」と振り返った。

同じく遺族の佐藤和隆さんは、「上に立つものがやるべきことをやらないでいれば命を失わなかった」と当時の校長を批判した。原告側弁護士の一人、吉岡和弘さんは、確定した判決について「地震が起こる1年前から、学校で、子どもたちの安全を預かる先生がそれぞれに課せられた役割、義務を履行すべきであった」とした点を「画期的」と評価。責任は校長だけにあるのではなく「組織としてやるべきことをやっていないといけない」と指摘した。同じく原告側弁護人を務めた齋藤雅弘さんは、この判決の要点について「全体をひくくおぼえて、あなたたちは悪いと言っている」と表現し、分業化が進んだ現代では、責任の取り方が変わってきているなどと述べた。